

243. 長浜市上寺地遺跡の調査(下)

5. 考 察

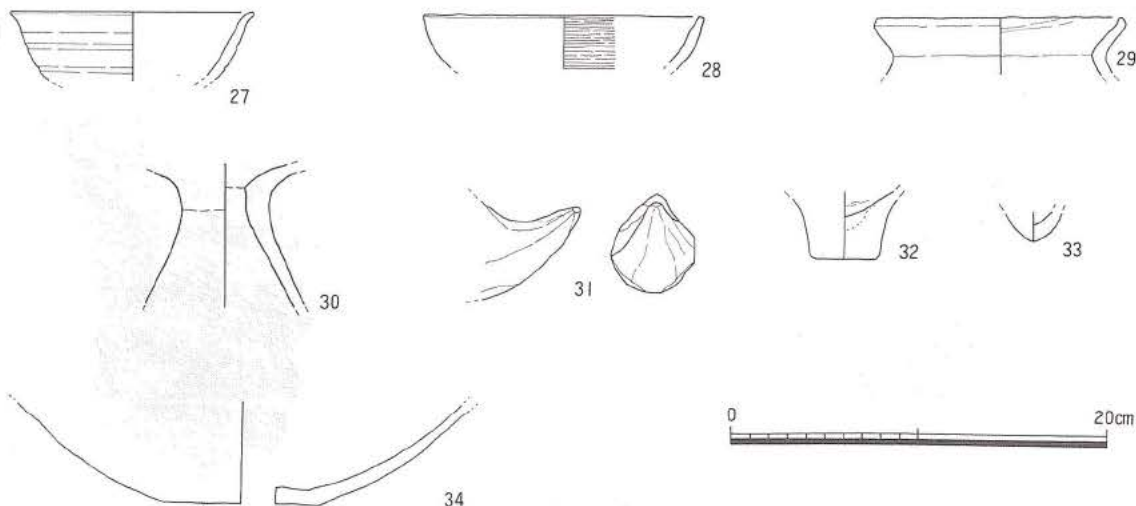
今回の調査の成果から、遺物、埋没墳等について検討してみたい。

円筒埴輪は、タガの断面形状によりA～Dの4種に分類できる。(第7図)A類は、主流とみられるM字状のもので、タガの貼り付け調整時に、親指、人差し指、中指の3本を使ったもので、中指の強力なナデが溝を生み出したものとみられる。B類はA類には近いが、台形状でほとんど、指ナデ痕跡のみられないもので、主流ではあるものの、A類工人との技法の差があるのではないだろうか。C類は、B類と同じ台形状ではあるが上底部と下底部が広がり、高さも低くなってしまいうもので、A・B類に比べ出土量は少ない。時期差による混入なのか。D類は、断面三角形で4点のみの出土であり、明らかに1世代以上の隔たりのあるものと考えられ、A類に比べ焼成も軟質である。混入であろうか。過去の調査例、表採例からも、A・B類に近似するものは出土しているが、C・D類は今回が初見であると言って良い。また、円筒埴輪は第4図-7の出土から2突帯の3段構成か、或いはそれ以上のものが考えられそうであり、また調査では須恵質の円筒埴輪

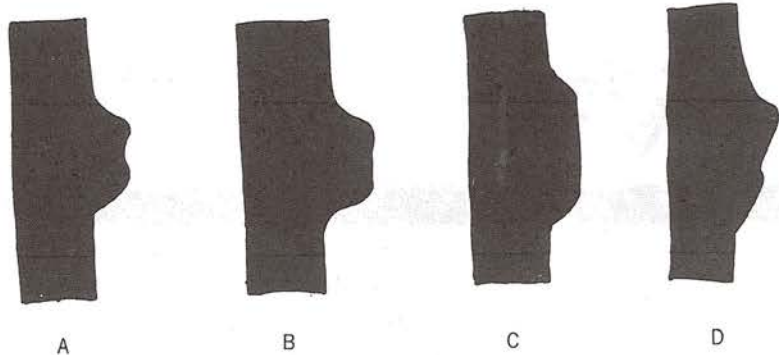
の出土がみられなかった^①。そして、混入説もC・D類から検討したが、No.2グリッドでの独立した周溝の存在から、複数の古墳が構築された可能性もある。No.3グリッドの南高北低の丘陵状の地形は、現在でも南側に高まりを見せるゆるい丘陵となっており、古墳の可能性があり、全体的には北東方向に軸を持つ瓢形のものとなっている。これが古墳だとするならば、40m級以上のものとなり、軸の方向から垣籠古墳を意識するように思われる。道を1本隔てて南側にある垣籠自治会館の造成および児童公園を造成する際には多数の埴輪が出土したということからも、その可能性は決して否定できないだろう。

しかし、何故古墳が破壊されてしまったのか。古代条里制導入に伴う破壊は、遺構、遺物からも検証できなかった。すなわち初期の破壊はグリッドNo.4・5にみられる中世の溝とピットにあると考えられ、図化した灰釉陶器の量が物語っているとおり、古墳破壊による集落の形成であった。これは、当時の社会情勢の影響によりとられた手段であり、堀と溝を巡らした集落の必要性があったからである^②。

また、中世における古墳の墳丘利用法として、今城塚古墳(大阪府高槻市)のように、城塞化する例、市内に存在する堀部城跡のように、周辺古墳群を土塁で囲み防御ラインを形成する例がある^③。その他に、阿保



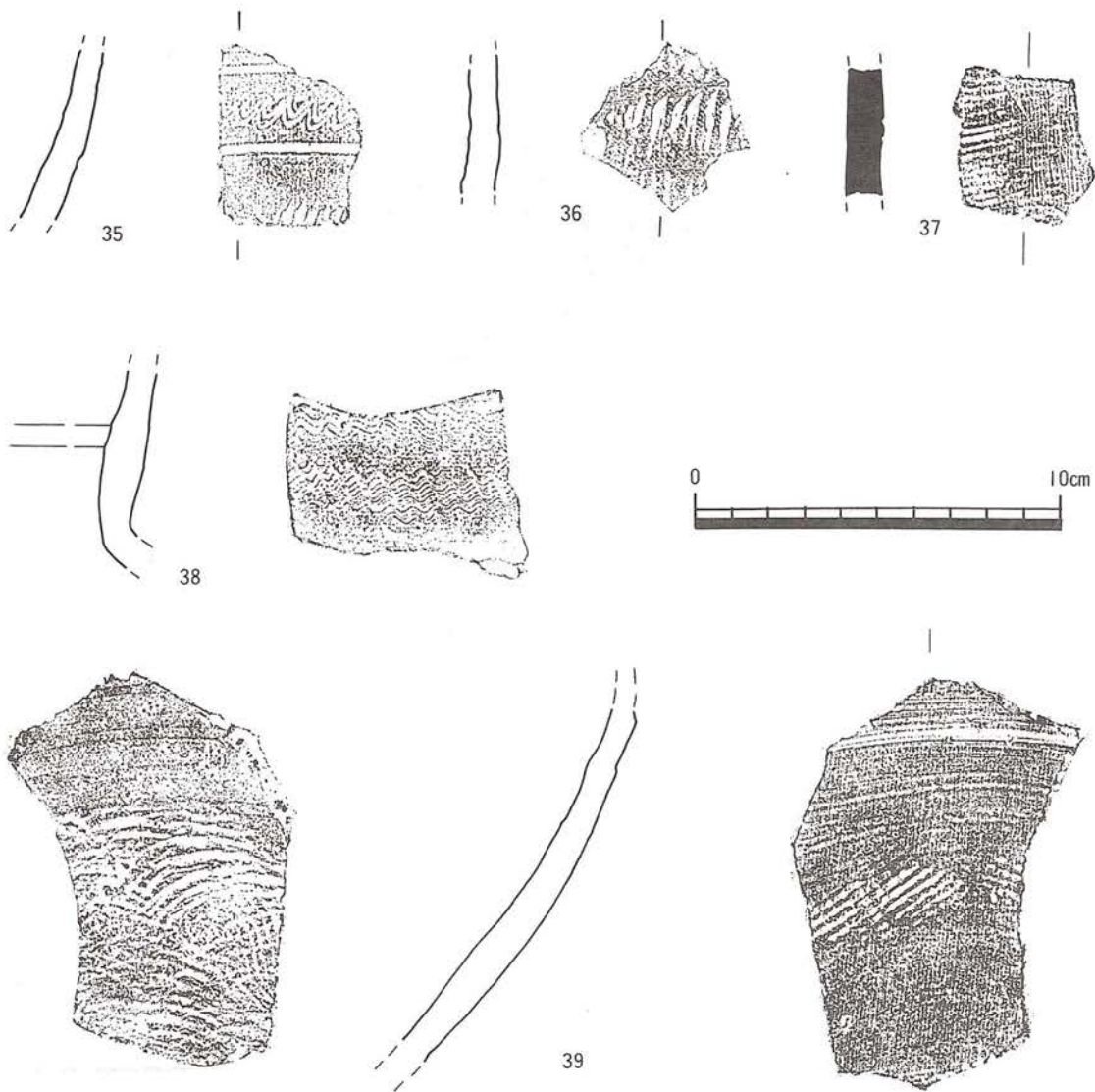
第6図 出土遺物 (No.27～No.34)



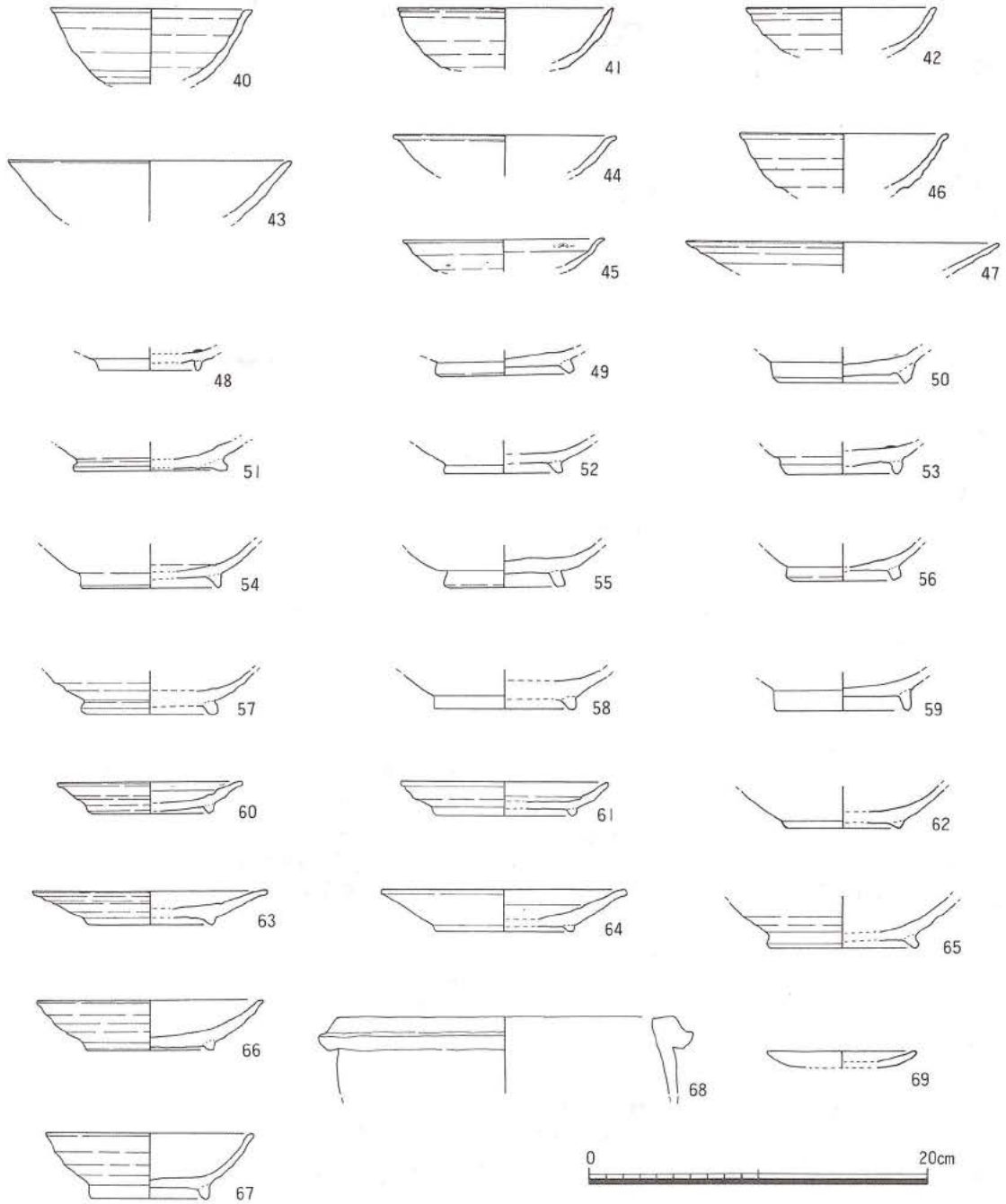
第7図 タガによる埴輪分類

親王塚古墳(兵庫県芦屋市)のように周辺古墳群が破壊されようとも盟主墳のみが残り、中世の文献でも近海(瀬戸内海)を港行の際には帆をおろして、古墳にむかって頭を垂れたという記述があり、信仰の対象となったものもある^④。

今回確認された破壊例は、阿保親王塚古墳例に近いものと考えられ、周辺古墳群



第8図 出土遺物 (No.35~No.39)

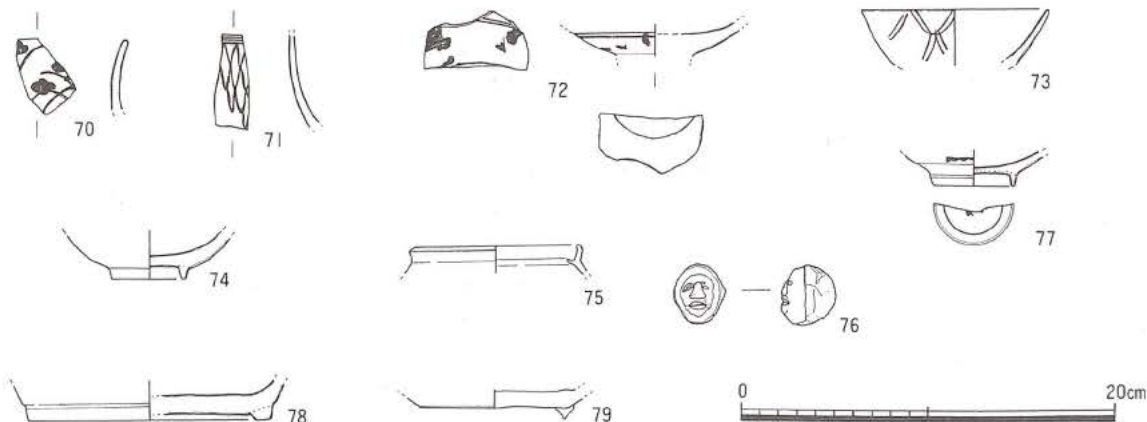


第9図 出土遺物 (No.40~No.69)

の盟主こそが、垣籠古墳であったのではないだろうか。周辺古墳は、限られた狭い土地で米を中心とした農作物増産のために破壊され、有事における備蓄が急がれたのではないかと⑤。

そして、堀・土塁に囲まれた集落が登場する。こうしたことから、盟主墳のみが残ったのである。

さらには、字名、地名から検討すると、垣籠という地名は「囲いこめ」という意味があるものと思われ、垣根、土塁などで囲うということが言えるのではないだろうか。これは、表記された文字からだけでなく、「かいごめ」と発声された意味から検討したもので、地名はあて字や年数がたつにつれ音が同じであっても



第10図 出土遺物 (No.70~No.79)

変化するものがある。周辺字名にも^{かいと}垣内というものがある。「かいと」とは、堀を巡らした中世集落を示す地名である^⑥。市内には「かいと」という字名が非常に多く残っており、防御的性格を持つ中世集落が乱立していたことを証明している。この集落構築のためにも、古墳が破壊されたとは考えられないだろうか。

そして、最後の破壊が近世染付磁器の示す、元禄から享保期の破壊である。どの時代においても人が生き抜くために行われたものである。

以上のように、埋没墳の調査からその破壊の理由までを検討してみた。これからも、埋没墳の調査は増えるだろうが、たとえ短期間の調査であろうと投げ槍な態度はさけるべきである。

本稿をまとめるにあたり、県文化財保護協会 技師 稲葉隆宣氏から御教示を賜った。記して感謝します。

また、震災を受けた西宮の実家が、二次災害をさらに受けたため、大幅に原稿執筆が遅れたことを深くおわびします。(西原 雄大)

註

- ①「たくさんの埴輪が復元された—長浜市上寺地遺跡—」(滋賀埋文ニュース第196号1996.7.31) 県文化財保護協会の行った調査では、川西編年のIV期に相当するもので、3突帯4段構成の円筒埴輪が多数出土している。
- ②木戸雅寿「水辺の集落の原風景」(渡辺誠編『湖の国の歴史を読む』新人物往来社 1992)
西原雄大「中世の集落—長浜市宮司遺跡の調査」(『滋賀考古』第11号1994)
- ③「いま真実を語るハニワたち」新池ハニワ工場公園開園記念シンポジウム資料集(高槻市埋蔵文化財調査センター編 1995)
西原雄大「長浜市埋蔵文化財調査資料 第9集 堀部西遺跡調査報告書」(滋賀長浜市教育委員会

1995)

- ④「古墳と伝承—移りゆく“塚”へのまなざし」(芦屋市立美術館編 1993)
森岡秀人「古墳時代の芦屋地方(上)」(『兵庫県の歴史』23号 兵庫県史編集専門委員会編 1987)
『打出小槌古墳現地説明会資料』(芦屋市教育委員会 1986)
「芦屋で大型古墳の一部発掘」(『季刊考古学』17号 雄山閣出版 1986)
- ⑤現在、県文化財保護協会の行っている調査では、茶臼山古墳の直下、山すそ部ギリギリのところまでを発掘調査しているが、そこでさえも円墳と考えられる埋没墳が検出されている。この古墳の破壊は、農産物増産であったろうことが考えられそうである。
- ⑥西原雄大「長浜市埋蔵文化財調査資料 第13集 金剛寺遺跡発掘調査報告書」(滋賀県長浜市教育委員会 1996)

参考文献

- 『前方後円墳集成 近畿編』近藤義郎編(山川出版 1992)
『改訂近江國坂田郡志』(坂田郡役所 1941)
細川修平「埴輪から見た「近江」の古墳」(滋賀考古 第11号 1994)
川西宏幸「円筒埴輪総論」(考古学雑誌 第64巻2号 1978)
大橋康二「肥前陶磁の変遷と出土分布」(『北海道から沖縄まで 国内出土の肥前陶磁』佐賀県立九州陶磁文化館 1984)
「長浜の地名」(『歴史』第十九号 滋賀県立長浜北高等学校歴史部 1972)
足利健亮「地名と日本文化」(『近江の歴史と文化』木村至宏編 株式会社思文閣出版 1995)